

母権論(連載第十回) エジプト(六)

第八章

エジプト・リビアにおける女権の検証に関連して、キュレネの女たちに言及した。これから私はオイディプス神話について詳細に考察しようと思うが、(一)そのきっかけはすでに以前(二)ソポクレスから引用した箇所存する。そこでは、愛するが故に遠方にまで父についてきたオイディプスの娘たちがエジプトの女たちに喩えられていた。ギリシアの悲劇詩人の作品『コロノスのオイディプス』^(三)でのこうした比喩は、もしオイディプス伝承そのものに或る程度の誘因がなければ奇異の念を与えてしまうはずだ。エジプトが出てくる根拠は、オイディプス神話で決定的な位置を占めているスフィンクス^(四)である。^(五)またそれに劣らず重要なのは、オイディプス及び彼の属するラブダコス一族のカドモス^(六)との結びつきである。カドモスはディオドロス(一・二三・四)とパウサニアス(九・一二・二)によるとエジプトの出身とされているが、^(七)一方ではエパポス^(八)やネイロスの

ヨハン・ヤーコプ・バッハオーフエン
佐藤 信行・三浦 淳・桑原 聡 訳

娘アルギオベ^(九)を先祖とするとも、またアゲノール^(一〇)を通してリビアを出自とするとも言われている。^(一一)こうした結びつきがあるからこそ、悲劇詩人はエジプトにおける女たちの習俗に言及することができたのである。したがってまたオイディプス神話はエジプトにとっても重要である。ここはこの神話を本格的に考察する場ではないから、我々の研究とこの神話との関連に光を当てるために重要な観点をいくつか指摘しさえすれば十分であろう。

オイディプスがその神話においてどのような宗教的観念に基づいて考えられているか、誤解の余地はない。彼の名の元となった^(一二)腫れた足は、彼が男性自然生殖力の担い手であることを示している。男性自然生殖力という大地的・ポセイダンの観念は足、或いは靴と結びついて現れることが稀ではない。例えば、アイエテスの青銅の足を持つ牛たち、^(一三)牡牛の足を持つディオニュソス、マルスの「進軍する者 Gradius」という呼称(「成長する cresco」ではなく「進む gradior」に基^(一四)く)、イアソンとペ

ルセウスの靴、(二三) ヘラクレスの足跡、(二四) エリクトニオスの大蛇姿、(二五) オノスケリスⅡエムプサのとり様々な姿、(二六) カリラ(二七)、タナキイル(二八)、ニトクリス(二九) においてである。(二〇) 腫瘍の原因となった馬車は、周知のとおりネプトウーヌスの意味を持つ。それ故にオイディプスはヒュギヌス(f. 六七)では「他の人々よりたくましい〔羅〕」と言われ、アポドロロス[三・五・七]では「力が同輩よりも優れていた〔希〕」と言われるのであり、それ故に海岸で衣服を洗濯していたペリボエアによって発見されたのであり、それ故にまたライオスの息子とされたのである。というのもライオス Laios という名は、ラエルテス Laertes (二二) 同様に生殖力を言い表す (二二) la (三三) に還元され、意味の上ではオイディプスと一致するからである。そのためオイディプス伝説では、腫れた足によってライオスの息子であることが分かったという言い方までなされたのである。オイディプスはヒュギヌス(一・一)においては「恥を知らぬ者 impudens」と言われているが、それでいて母親との関係には触れられていない。この言い方で暗示されているのは溢れんばかりの官能として捉えられた力と生殖欲であって、これは沼沢地の乱交に見られる大地的生に象徴されているが、以上の点をふまえれば腫れた足の意味も一層的確に把握できよう。自然力のこの段階では、幾多の神話が示すように、母は妻とも、時として娘とも見なされ、彼女らの前に男は受胎させる者として現れるのである。すなわち母性的大地物質の前を、男たちは順々に代替わりしながら

ら受胎させつつ通り過ぎていく。息子が夫となり父となり、同一の太母が今日は祖父と、明日は孫と交わる。こうしてイオカステに関する「謎 aenigma」、(二四) すなわち「息子たちの祖母であり、夫の母である〔羅〕」が成立する。

そうした意味から、オイディプスは「スパルタイ Meabro」の一族、「竜の一族 genus draconum」(二五)に属する。生殖力を持つ竜、湿った深みに棲むラドン(二六)によって生命を吹き込まれたが、スパルタイには「私生児 spirit」同様はつきりした父はなく、母しかいない。「私生児 spirit」(「播く〔希〕」に由来)という名称にしてからが、スパルタイと完全に同じ意味なのである。(二七) こうした関係から、子は実の父を知らないため、父殺しの可能性が生ずる。オイディプスの母はイオカステ(実に特徴的なことにエピカステとも「ホメロスでは」呼ばれた)、すなわちメノイケウスの娘であったが、このメノイケウスは明らかにスパルタイという竜の一族にさかのぼるのである。(二八) このスパルタイの一族では、女系の権利が支配的であったに違いない。事実、母権は非常に顕著に現れている。神話において王位篡奪者として現れるクレオンは、ライオスの妻であるイオカステが自分の姉妹であることを理由として王位に就くのであるから、母権の軌道へと戻っているのである。彼はまた、末娘グラウケを母権に従ってイアソンと結婚させている。(二九) ここには姉妹関係がすでに以前我々が見てきたのと同じ意味で出てきているが、それは特にカドモスの娘エウロペに顕著に認められるのであって、彼女を捜

し出すためにキリックスとフェニックスの兄弟が父アゲノールにより送られたのであった。(三〇)

大地的母性の表現として現れているのがテュポンの子スフィンクスであり、免れ得ない死の掟という暗い意味での大地的法を表現している。(三一) スフィンクスはエチオピアの最も辺鄙な地域の出であるが、(三二) そこはテュポンの同盟者アソも女王として支配したところであり、また後世に至るまでカンダケが女性統治者の名となっていたところである。スフィンクスが長らく権力を持ち得たのはその謎のためであるが、この謎は人間をただその無常の側面からのみ捉え、死すべき人間が墓に向かつて歩む過程を、人間存在の最終にして唯一の思想として示している。これは大地物質が唯一支配的な宗教段階であり、人類はまだ父を知らずただ母のみを知る状態にある。スフィンクスの謎かけの根底には、竜の一族の持つ生の掟がある。全く希望のないその正体を見破られた瞬間に竜は破滅するしかない。母しか持たず暗い深みの竜によつて生を享けたスパルトイの一族は、テュポンのスフィンクス(ピクスとして、ピキオン山上に君臨し(三三))を女性支配者と認めていた。彼らを闇の中から光のもとへと送った同じ物質が、また彼らを呑み尽くす。彼らの運命は、誰一人悼むでもなく生まれ生長し死んでゆく沼沢地植物のそれと何ら異ならない。人間はまだ大地的生殖という最も低い領域を克服していない。(三四)

オイディプスにおいて初めて、人間存在の一つ高い段階への進歩が認められる。彼は、その苦悩と難行が一段と美しく人間的な

文化への道を拓いた者たちの一人である。彼らは、自身は太古の時代に生き、そこに生まれながらも、その時代の最後の偉大な犠牲者となつて、そのことにより新しい時代の創設者ともなった。スフィンクスとともに、竜の一族の最後の一人であるイオカステの父も滅びる。いくつもの神話に見られる城壁からの転落の話は、(三五) 常に母性的大地主義との関連を示している。土でできた、したがって大地の「聖性〔羅〕」にあずかる城壁は、大地主義の王国に属するからである。スパルトイ族とスフィンクスの両者が時を同じくして没落したことは、両者の基盤となっていた原理が同じものだったという事実を証明するものであつて、この原理を背景としてこそオイディプスは登場したのだった。

ライオスの息子「オイディプス」において男性力は女性物質と並んで独立した意味を持つに至る。男性力がオイディプスの名において登場し支配力を持つのである。加えて、オイディプス神話のいくつかの特徴は特に男系を強調している。父だと思つていたポリュボスの死を息子は悼むが、足の状態はライオスが父であることを暴く。オイディプスによつて初めて子供たちは嫡子として生まれるようになるのだ。カストルとポルックス、レムスとロムルスのように、ポリュネイケスは生と交代する死の権力としてエテオクレスに王位を譲るのだが、そのエテオクレスはエテオクレテースと同様に父方の嫡子である。(三六) 子供たちは「単系unilateral」から「双系〔デュエニヤリス〕」となつた。オイディプスはこの点で全くアテナイのケルコプスの性質を受け継いでいる。アテナイ

オスとユステイヌスによれば、母との排他的な結びつきから父系の嫡子への同様の移行がケルコプスの名と結びついていっているからである。(三七) この新しい種族の人間はもはやスパルトイヤ「私生児 spurii」ではなくオイディプスの息子たちであり、或いは始祖にさかのぼって、カドモスの子孫、ラプダコスの子孫、嫡男にして「双系」となる。この移行は、スパルタ人とラコニア人或いはラケダイモン人(石の・神^{アステイギン}「希」)との関係を説明してくれる。ここに「エテオクレスの館「希」」(『イリアス』四一三八六)が始まる。

排他的母性という原初的な状態は大地的生殖に対応しており、そこではイオクソス一族の神話が証明するように女性物質だけが注目を浴びるのだが、結婚生活を基盤とする新しい生活状態がデメーテルの生活段階として現れる。そして、事実オイディプスはデメーテルと極めて密接な関係を持つ。彼は彼女の神殿に葬られている。その神殿は彼にちなんでオイディポデイオンと呼ばれている。遺体をそこから動かすことを神託は禁じた。すなわち「その神は神の保護を嘆願する者を動かさないと命じた〔希〕」。このオイディポデイオン＝デメーテルの場所が、それ以前はケオスという名であったのが、エテオーノス(『イリアス』二・四九七)と呼ばれるようになったのは非常に特徴的である。(三八) エテオーノスにはデメーテルの嫡子の性格が、ケオスにはアフロディーテの関係が現れているからだ。というのはケオス——ギリシア人の間では変化してケイオス、ケー、ケオス、キアとなっているが——では、アフロディーテ・ユリスが支配し

ていてからだ。(三九) 彼女については後で問題にするつもりであるが、ハルモニアやカドモス一族全体において重要な意味を持って登場する。オイディプスは、デメーテルと組んで平安を見いだすために、このヘティラの関係から脱するのである。

同様の意味は、神話がイオカステの外套の留め針に与えている役割に見て取れる。(四〇) 留め針の持つアフロディーテ的な含みは、先に検討したアテナイーアイギナの伝承に示されていたが、(四一) ここでも同じことが繰り返される。アフロディーテ的な関係の象徴である留め針によってオイディプスは自らの視力を奪うが、これは、彼が母と交わったことにより光の権力の持つ純粹な法を侵害したためである。(四二) そこには、オイディプスがこうむったあらゆる苦悩の元凶である不純なヘティラの大地的母性への断罪が示されているが、このヘティラの母性を乗り越えて彼は純粹なデメーテルの法へと前進する。まさにこのことによってオイディプスは、諸民族にとつてあらゆる災厄を振り払ってくれる慈悲深い神となるのである。コロノスでも、アッティカーポイオティアの国境の町エテオノスでも、彼の墓は隣国の無法な侵入に対する防壁と見なされていたし、彼の後継者たちの間に起こったあの血なまぐさい戦争に際しては、ある神託によると、オイディプスの参加と援助を得た方が勝利するとされたのである。(四三)

それ故、彼はまたテーセウスとも結びつく。このアッティカのヘラクレスともいべきテーセウスは、指輪の試練で父との血の

つながりを証明し、女の敵対者にして高度な父権制の創始者として現れたのであったが、この点でオイディプスと並べられる。それ故オイディプスはアテナイでも尊敬された。(四四) アテナイは

高次のアポロンの光の権力を最も純粹に發展させ、それ故女たちにも神聖視されたからだ。(四五) 特筆すべきは、自らを高めたもの

とオイディプスを見なし崇拜したのが女性自身であったということである。デメテル的な生を確立した点で彼は女に恵みをもたらしたのであり、女を解放したのであった。ヘレナのヴェールがそうであったように、ハルモニア的首飾りやイオカステの外套の留め針にはヘティラ的アフロディーテ的生活の呪いがつきま

とつていたのだが、(四六) いまやデメテルの掟が女に安らぎと

宥和をもたらすのであり、ヘテリズムを脱して母の定めへと進歩し一対一の婚姻に基づく幸福な男女の生活を保証するのである。

イスメネとアンティゴネの献身は根本的にはこの点にこそ理由がある。以前はあらゆる呪いの源泉であった女は、いまや自らにとつ

ても男にとつても祝福となる。ヘティラの悦楽はアフロディーテの掟にのみ従うもので、この悦楽に没頭したライオスはペロプス

の息子クリュシポスを恥ずかしめることで我が一族に呪いを招来したのであったが、(四七) いまやこの悦楽に代わって男たちの争

いを調停し、宥和と保護をもたらす愛の献身が登場する。血をし

たたらせた復讐の女神たちは慈愛の女神となる。そうして宥和に至った彼女らは、一族の宿命を担い耐え忍ぶ者に、自らの森を提

供する。彼は彼女らのもとで安らぎを得るのである。

アイスキュロスは彼のオイディプス三部作(四八)で、古く血

なまぐさい大地の法を新しく穏やかな法と対置させる機会を持つ

た。前者は殺人から殺人を生み、同害刑以外は知らず、悪事には

悪事で報い、贖罪を知らずただスフィンクスの破滅的な謎のみを

念頭におき、あらゆる一族を根だやしにするのに対し、後者はア

ポロンが告知する法である。そしてこの対置は、オレステス三部

作に現れていたのと同じものである。オレステス三部作でのエリ

ニウスたちは、血みどろの職務を放擲し復讐の大地母神から恵み

の母神へと変化を遂げたいと願っていたが、オイディプス三部作

での彼女らも、長期間追ひ回していた者を(四九)進んでかくま

うとするのである。オイディプスはデメテルとばかりではなく

エリニウスたちと共に崇拜された。神託に従って、テーバイの

アイゲイダイ族は、大地母神の怒りが一族の子宝を脅かしたので、

オイディプスとエリニウスたちのために共通の社を設立し

た。(五〇) ここには純粹なアポロンの法のもとに女が従属する様

がはつきり見てとれる。なぜならアイゲイダイ族の神はアポロン

であって、そのカルネイアの祭(五一)はテーバイからスパルタと

テラをへてキュレネのバットスの子孫たちにまで広まっていたか

らだ。(五二) 救いはアポロンから来るのであり、彼の高い法にエ

リニウスたちは進んで従属するのである。アポロンのために彼女

らは喜んで自らの血なまぐさい職務を捨てる。ライオスのエリ

ニウスたちとオイディプスとに和解するよう命じたのは、アイゲ

イダイ族の神「アポロン」であった。オレステス三部作にあって

は母殺しによって大地母神が地中深くから呼び出されたのであったが、ここでは大地母神は父殺しの復讐の神として現れている。これは彼女らが母の性質のみを持つことと何ら矛盾するものではなく、むしろそうした性質の拡張なのであって、この拡張自体がアポロンの法に基盤を持っている。アポロンに従属することによってのみ父とのつながりは可能になるからだ。この拡張がすでにエリニウス祭祀が高次のアポロン祭祀とつながりを持ったことの反映なのであり、このつながりはオイディプス三部作のあらゆる部分にピュティアの神託が導入されているのを見れば明らかである。(五三) 最古の思考法に従えば、アガ멤ノン殺しがエリニウスたちの眠りをさますことがなかったように、彼女らがライオスのために立ち上がることもあり得ないはずだった。アポロンに属して初めて彼女らは父及び傷つけられた父権の代理人ともなるのである。こうした新しい結びつきを得た彼女らは、大地の法のみを知る非宥和的で血なまぐさい母神ではなく、高次の贖罪を進んで認めようとする宥和的で善意の神として現れる。慈悲の女神としての性質を持った彼女らのために、アポロンを奉じるアイゲイダイ族は社を建てる。この性質を帯びることにより彼女らはオイディプスと結びつく。ライオスの復讐の女神とオイディプスのために共通の社を建てるよう神託が命じたのは、あの血なまぐさい原初的な神々のためではなく、アポロンの原理に馴染み、この原理と結びつき、憎悪と復讐に代えて愛と気遣いを身につけた宥和的母神のためだったのである。

こうしてみると、オイディプス三部作はオレステス三部作と同じ意義を持つと言える。いずれにおいてもエリニウスたちの大地の法は、克服され、高次のアポロンの法に従属させられるものとして描かれている。オイディプス三部作はオレステス三部作を補い、その後が続く作品なのである。オレステスの場合にあっては、アポロンは母の代理たるエリニウスたちに対する闘いを敢行し、もっぱら彼女らに属する〔母の〕領域で彼女らを打ち負かしたのだが、オイディプスの最終的な和解にあつて描かれているのは、アポロンの父性原理に対してなされた犯罪もまた贖罪を見いだす様なのである。いまやピュティアの神〔アポロン〕の穏やかな法は、あらゆる領域に例外なく行き渡る。父ライオスの復讐の女神とオイディプスとの和解により、アポロンの善き力が完成しあまねく広まった様が表示される。畏怖すべき女神たち〔エリニウスたち〕は、オレステス三部作の中では和解はしたもののいまだに母性の代理人であり、アポロンとは原則的に距離をおいていたが、いまやこの父性の神と密接な同盟を結ぶに至る。気高い母神の神殿の中でアポロンは、耐え忍んできた者〔オイディプス〕に運命からの解放を告げ、アポロンを奉じるアイゲイダイ族はこの母神の祭祀を担い広める者として現れる。オイディプスと、父ライオスの復讐の女神とは、共にピュティアの領域に招き入れられ、言うならばアポロンの性質の中に迎え入れられたのであり、したがって母クリュタイムネストラの復讐の女神がそうであるよりはるかに光の父性原理と近い関係を持つに至るのである。母

クリュタイムネストラの復讐の女神は女性原理との関連故に、ピュティアとの盟約からは締め出されたままであった。オイディプス神話がピュティアの神話領域に入ったことに、この神話の最高段階が示されており、この神話とその主人公の最高度の聖化が示されているのである。

三段階の発展が見られる。そもそのオイディプス神話には物質的なヘイラの母性主義からデメーテル的な婚姻制への移行が表されていた。婚姻は子供に父を与え、それにより真正な生まれを保証し、知らずして父を殺し近親相姦を行うような時代に終止符を打ち、高次の人間的な生き方そのものを用意する。そしてデメーテルの段階からアポロンの段階への進歩がなされる。オイディプスにより父性原理が勝利を収めた後には、ピュティアとの提携によって最高度の純粹さと精神性が加わる。こうして、父性を知らず暗い宿命を帯びていた原初の母性主義と相対して、アポロンに表現されるような、母性を知らず光輝と純粹さと寛容と宥和を事とする父性主義が、発展の頂点として現れるのである。母性と父性の対立が大きければ大きいほどに、ピュティアの神の名声は一層高まる。ラプダコス家の運命にあつて不吉な出来事が避けられないからこそ、物質的な法と完全に物質的な時代という暗闇を超えてたち昇るかの神の星辰の如き輝きは一層素晴らしいものとなる。この神は人類を不純で動物的な生き方の泥沼から救い上げ、勝利のうちに、寛容と秩序と精神に輝く生活へと導くのである。復讐の女神たちの恐るべき懲罰ではなく、古き神々と和解

し宥和と平和の法たるアポロンの天上の法へと彼らを導くことが、オレステス神話とオイディプス神話に込められた究極的な思想なのであり、和解した女神たちは今度は旧に倍する厳格さをもって新しい法が遵守されるよう監視するのである。

以上のような発展の諸段階は、人類の歴史的発展に対応している点できわめて重要である。オレステス神話にも、そしてそれに劣らずオイディプス神話にも、最古の宗教段階からより純粹な段階への移行の記憶が、そしてその転換を招来しそれにつきまといつてくる苦悩と暗い事件の記憶が根底にひそんでいるのである。太古の民族の記憶をとどめているそうした神話は、同時にまた原初的な宗教観念を知る源ともなる。歴史上の出来事は素材となり、宗教がそこに形式と表現を与えるのである。現実の事件は全て記憶の中に収まるやただちに宗教的な形をとる。太古の時代にあつては人間の思考全体を信仰が支配していた。事件とその主役たちは宗教の衣をまとう。宗教上の事実と歴史的事実とを同一の神話的形姿が包摂する。宗教と歴史は分かれることなく、一つのものとなる。オイディプスとオレステスは宗教であると同時に歴史である。宗教と歴史はいずれも他方を通じて、他方があればこそ成立する。人類の歴史上の大きな進歩は、いずれも宗教の領域にも痕跡を残しているのであつて、宗教はいつの時代にも文明の大きな担い手であつたし、太古にあつては唯一の担い手であつた。したがつて神話伝承に形を与える基となつた宗教観念を私が展開してみせたのも、それによってラプダコス一族の運命に

織り込まれた歴史的事実を否定し、実在したものを雲散霧消させんがためではなく、むしろ言うならば象形文字を解説する鍵を差し出そうとしてのことだったのだ。この象形文字を解説し得る者は太古人類の意識世界を垣間見ることができるのでだし、またこれ以外の方法ではそれは不可能である。こうして我々の眼前に繰り広げられる絵巻物は、不愉快な印象を与え、人間はそもそも最初から高貴な生き方をしてきたのだという矜持を傷つけるかも知れない。だが、人類が動物的本性を少しずつ段階的に克服してきた様を見れば、下部から上部へと至る道を、物質の暗黒から天上的精神的原理の光輝へと至る道を、あらゆる浮沈を繰り返しつつも最後までたどる力が人類には宿っているという確信が揺るぎないものとなるであろう。

*

*

第八章

アフリカを論じ終える前に、(一) 先に触れたカンダケ(三四四ページ〔第六〇章冒頭〕)について、そこで述べることができるなかった点を幾つか補足しておかねばならない。

エチオピアの女王と、ペトロニウスが彼女に勝利を収めたことについては、カッシウス・ディオも五四・五・四で語っている。(二)

カンダケとその宦官についてはクリュソストモスが『説教集』

一九 (ed. Paris. alt. [1873] vol.9 p. 162 [= Migne PG 60, 150 sq.]) で触れている。「エチオピアの宦官がいて、エチオピア人の女王カンダケの高官であるといわれている。エチオピア人は女王によって支配されていたことは明白だ。実際、古くは女たちが支配していたのであり、それがエチオピア人の法であった。〔希〕エウセビオス『教会史』二・一・一三にはこうある。「しかし主の福音が日々広まる一方、神のお導きによってエチオピア人の大地を離れて、かの地の女王の、今なお祖先の習慣に従って女に支配されている国の高官が送られてやってきた。〔希〕ストラボンは一七・七八六を参照。(三)

サバの女王についてはヨセフス『ユダヤ古代誌』八・一五八以下を参照。ヨセフスは彼女のことを「八・一六五」「エジプトとエチオピアの女王、知恵に富みあらゆる点で秀でた女〔希〕」と呼び、ヘロドトスのニトクリスと同一人物と見なした。ちなみに彼はニトクリスをニカウレーと呼んでいる。ヘロドトス二・九九、一〇〇を参照。(四) サバの女王についての記憶は、次に引く伝承に生き続けた。「ヨセフス、前掲書、八・一七四」「我々はバルサム樹の液汁の根を持ち、わが全土は今なおそれを生み出す、これはこの女王の贈物なのだ。〔希〕」(五)

リビアの一種族アドウルマキダイ(「ナイル河畔に住む種族〔羅〕」とシリウス・イタリクスは三・二七九、九・二二四で述べている)についてはヘロドトスが四・一六八で次のように報告している。この種族は衣服を除いてエジプト人の全ての習慣を身

につけていた。女たちは両足に青銅の輪をはめ、髪は長く、そこに虱がわかないよう細心の注意を払っている。これによってこの種族は他のアフリカの種族と区別される、と。「また嫁入り前の娘を王に提供するのも、この種族に限られた風習である。そして王の氣に入った娘は、王によって処女性を失うのである。〔希〕」ヘロドトスの記述全体から明らかにするのは、アドルマキダイ族が開化したエジプト人の影響により他のリビアの種族よりも高い文化段階へと進展した事実である。ヘテリズムは婚姻生活に取って代わられた。「二重の者〔希〕」として女たちは両の足に輪をつける。対して男は左足のみを覆うのだが(シリウス・イタリクス三・二七九)、これはヘルニキ人とアイトリア人に見られた同様の左の神聖視に対応して(四一八ページ以下〔第七八章〕)、「左、すなわち母の側の大きな名誉〔羅〕」を強調しているのである。長い髪もこのことと合致する。何故なら、髪を短く刈ることは、ヘテイラ的と考えられた自然母神「禿頭のウエヌス Venus calva」に髪を捧げることを含意しているからである(ブリニウス『博物誌』一六・一九四を参照)。こうしてみると王のために取っておかれた「処女権」も文化発展のしるしと見られたに相違ない。事実それは、以前は広範囲に行われていたヘテリズムの制限という観点から見さえすれば、開化の光を帯びて現れるのである。王のみがまだ古い権利を有しているものであり、それも彼に付与された高次の宗教的性格においてのみなのである。こうした宗教的性格は、エジプト王がパラデースたちに対して持つ

ている関係に、異なっているが類似した形で現れている。(六)結果としてアドルマキダイ人女性の地位は、エジプト女性のそれに非常に似ているということになる。

私は先に(四一四ページ、註八〔本訳では第七七章註一二〕)、ある中高ドイツ語詩人の手になるものと報告されている記述「キュニス(チュニス)では男ではなく女が遺産を相続する」を引用したが、この場を借りてポリュビオス一・七二・五に見られる記述をつけ加えておきたい。リビア諸都市がカルタゴから離反したこと、そしてこれらの都市が傭兵隊長マトス(七)及びスベンディオスと結託していたことを描写した箇所、リビアの女性についてはこう言われている。「女たちは以前税金不払いのため自分の夫と父が連れ去られるのを見ていたが、市民に向かって、自分の所有物を決して隠さないと誓い、装身具をためらうことなく寄付として兵士の賄いに供出した。〔希〕」この話の全体の脈絡から、女性たちが自らに課した誓いが単に女の装身具のみならず財産全体に向けられていたこと、それ故財産の処分権が父親ではなくまず母親にあったこと、したがって相続権は息子ではなく娘にあったことが推測できるのである。債務拘留とカルタゴ収税吏による連行から夫と父を自由にする権利は、女性の手のうちにあったのだ。以前はカルタゴに対する憎しみも彼女たちの心をいささかも動かすことはできなかったが、いまや自ら何物も隠しだてするまいとする誓いを立て、装身具すらをも反乱者に提供するに至ったのである。

以上の解釈によってドイツの詩人の伝えているところはその真実性を証明されるのであり、さらに「結婚への助言」三五でのプルタルコスの記事に新しい光が当てられるのである。(八) 花嫁は結婚式の翌日に花婿の母親に使いを送り、壺を一つ所望させるというのだ。ここにおいても、母親のみが家計を自由にする権利を有する者として登場している。だがこの願いは退けられ、花嫁の要求は通らない。プルタルコスはこの拒絶に、嫁は初めのうちに姑の嫁いびりを知っておかねばならないという意味を与えているが、それはこの行為の持つ本来の意義を遠く越え出してしまう道徳訓的な解釈である。この拒絶はむしろ、レプティスの花嫁は花婿の母の財産にはいかなる請求権をも持たず、彼女の相続権は自分の母の財産に限定されているというところにその根拠がある。かくして、わずかしが残されていない痕跡を互いに結び合わせることににより、リビアの財産権はその大筋を明瞭に認識できるのである。それはアフリカ女性の支配的な地位に完全に対応しており、我々がリユキア人のもとに見いだしたのと同じ、母権制の拡充を示しているのである。

ヨセフス(前出引用箇所)(九)の記録によれば、ソロモンを訪れた女王がエチオピアの歴史に導入され、父方をソロモンに発するとするエチオピア王家の始祖とされた。(一〇)さて、マケダをサバの女王と同一視することにはいかなる史的正当性も認められないが、この同一視はエチオピアの女性支配という文化習慣によつて可能となったが故に注目に値するのである。女性支配とい

う土着の基盤がなかったなら、この転用は起り得なかったであろう。同様のことは、ヨセフスに見られるような、エチオピアをエジプトに関連づける他の記述にも当てはまる。そして、イスラエルの輝かしい王(「ソロモン」とのヘテリズム的アマゾンの結合を仮定して、この女王をニトクリスⅡニカウレーと同一視するに至るのも、同じ理由からなのだ。伝承がこうして伝播するのも、エチオピア・エジプト固有の風習の結果であり、したがってその確証なのである。

*

*

第八章

「カンダケ」の見出し語のもとに「アレクサンドロスの話に見いだされる」とある、先に引用した(二)『スイダス』の記述は、詳細な考察を必要とする。アレクサンドロスの項を見ると、カンダケとはインドの女王であり、このマケドニア人(「アレクサンドロス」)を変装にもかかわらず見破り、彼女の王国の平和と王権の安泰とを確約させた人物とされている。これと同じ話に幾人かの著述家が触れている。ツエツェス『キリアデス』三・八八五以下はこうなっている。

私はメロエの女王カンダケについて語るのを忘れていた、

カリステネス(二)によれば、彼女はアレクサンドロスを捕

えたが、

並外れた贈物をして彼を釈放した、

なぜなら彼女の息子たちが互いに抱いていた敵意を、

彼が忘れさせたが故に。〔希〕

ここで暗示されている出来事については、ゲオルギウス・ケドレヌス（三）には次のように記されている。ポロス（四）が投降した後、アレクサンドロスはインドの奥深く寡婦のカンダケの王国に遠征した。いつものように彼は変装して自ら女王への使者の一団に加わった。「カンダケはそれを聞き、アレクサンドロスの顔の特徴を見てとって、宮廷で彼を拘束してこう言った。『アレクサンドロス王よ、汝は世界を支配したれど、汝を捕えたのは女なり。』〔希〕」驚いた王は和議を結び、女王とその国に対する敵対をいっさい慎んだ。

マララスは同一の出来事を（五）幾分細部にまでわたって物語っている。この場合でもカンダケはインドの支配者にして寡婦であり、アレクサンドロスの奸計を打ち砕いたほどの彼女の智慧は衆に抜きんでていたとされる。しかし結末は異なっている。制服者アレクサンドロスはその賢明な女に妻となるよう要求した。彼女の息子たちは大事にされた。しかし彼女は新しい夫に随いてエチオピアへ行った。

一五世紀のものであるグリユカの年代記（六）では、カンダケは同じく寡婦とされている。彼女は両目の色の違いから大王であ

ることを見破り、彼に随いてエジプトへ行く。ちなみにアレキサンドリアはそこに建設された。

マララスは我々を、ツェツェスの属した一二世紀とケドレヌスの属した十一世紀からユスティニアヌスの世紀〔六世紀〕（七）へと導いたが、いわゆるユリウス・ウァレリウス（『マケドニアのアレクサンドロス大王伝』（八））は同一の物語が西暦三世紀か、少なくとも四世紀には存在していたことを証明している。（九）この書は彼女の形姿をマララスやケドレヌスの場合よりもはるかに詳しく描いており、ツェツェスの簡略な記述を補ってこの人物像を全面的に明らかにしている。ウァレリウスの物語は最終第三巻の大部分を占めている。（一〇）征服者「アレクサンドロス」はペルシアからセミラミスの王国へと急いだ。そこは当時、セミラミスの曾孫で三人の子供を持つ寡婦カンダケの王笏に服していた。物語はマケドニア人「アレクサンドロス」と女王との文通から始まる。インドとエジプトの古い関係を示唆しつつ、アレクサンドロスはカンダケに次のように求めた。一緒にアンモン神殿に参詣し、両者に等しく馴染み深い神、婦人たちが奉仕している神を（二）共に崇拜しよう。しかし女王はアンモン神の神託が告げる禁止を盾にして彼に異を唱え、沢山の贈物によって友好の証しとすることと十分とした。ところが王は、女王その人を訪ねたいという抗し難い気持ちにとらわれた。そのことを知った女王はひそかにこの未知の男の肖像を入手させ、こうした手段で後に彼を見破る可能性を確保した。王自身も、彼の計画の実行に際して予期

せぬ事件の後押しを受けた。カンダケの息子の一人であるカンダウレスがわずか数人の騎士を伴ってマケドニアの陣営に近づいてきたのである。彼は捕えられ、プトレマイオス・ソテルの前に引き出され、相手をアレクサンドロスだと思つて自分の名を明かし、自分の行動の動機と目的まで話して聞かせたのだつた。自分は、先頃ベブリュキア人の首領に仕えるアマゾンの女たちによつて妻を略奪されたので、こうむつた恥辱に復讐するために赴くところであると。この思いがけない出来事を知つたアレクサンドロスは、カンダウレスの思い違いによつてもたらされた有利をすぐに悟つた。プトレマイオスは王の飾りを身にまとつた。役割を交換して、アレクサンドロス自身は打ち合わせに従つてアンティゴノスを名乗つて恭しく主人の前に現れ、乞われるままに、カンダウレスがその行動を遂行できるように武力援助を行えば、そうした行為によつて王自身の母オリュンピアスの名誉をも高めることになる、と主人に忠告した。出陣が決定され、偽アンティゴノスの忠告によりベブリュキア人への夜襲が決められた。カンダウレスはこうした一切の知恵に感服し、知恵こそ暴力よりも確実な成果を収めるにふさわしく、また誰にもましてアレクサンドロスその人を一層引き立てるものであると思つた。計画は首尾よく成功し、王のかねてからの願望が聞き届けられることになる。カンダウレスの申し出により、略奪された彼の妻を解放した者は、カンダケその人からふさわしい褒賞を得るために、インドの王都へと出立した。だがアレクサンドロスの知恵は女王の一枚上手の奸計により打ち

碎かれた。女王が案内して回つた王宮の各室のきらびやかさに目を奪われていた王は、突然にカンダケの口から彼自身の本名を聞かされ、呆然として女王の前に立ち尽くした。女王は戦争の英雄に対し知恵比べで決定的な勝利を収めたのである。秘密を漏らさないとの確約に安堵したのも束の間、王は危険極まりない新たな難問に直面せざるを得なかつた。というのはカンダケの年下の息子コラゴスが、使者の命を奪つてマケドニア人〔アレクサンドロス〕による舅ポロス殺害への血の復讐を行うよう、母に要求したからである。息子たちの仲たがいは武器を頼むまでにエスカレートした。カンダウレスはこうむつた恩義しか頭になく、コラゴスは失つた家族のことしか考えなかつた。カンダケは息子たちの不和に驚き、自分では解決の糸口を見いだせず、アレクサンドロスのより偉大な知恵に逃げ道を求め、そこに救済を期待した。王はその名声に違わなかつた。彼は、アレクサンドロス自らを贈物の受け取りによこし、それによつて憎むべき男〔アレクサンドロス〕をコラゴスの手に渡すことを約束し、窮地を切り抜けた。それまで争つていた兄弟は仲直りし、正体を知らぬこの異国人に敬意を表した。カンダケはいまや客の知恵に脱帽しないではいられなかつた。心底感服してカンダケは、アレクサンドロスは武勇のみならず知恵の誉れも高く万民の前に光輝くと述べた。彼女は彼を自分の息子にと望んだ。彼女が言うように、アレクサンドロスの母となれば世界支配が確約されるからである。王冠と王位のあらゆるしるしを女王からひそかに与えられ、英雄は彼女の役人に先

導されて帰路についた。しかしさらに一層素晴らしい褒賞が彼に残されていた。というのは神殿で彼は天の神々からその一員として迎えられたからである。セソニコシスⅡセソストリスは彼自身が享受する不死を彼に約束した。彼によって建設されたアレキサンドリアにおいて彼はセラピスと共に等しく崇拜を受けるようになる。カンダケが授けた王冠と、天上に光輝く神々に由来する約束、この二つの褒賞を与えられたアレクサンドロスは再び自らの軍勢と合流し、それを率いてアマゾンたちのもとへと急いだのであった。

〔この章続く〕